第25回小野十三郎賞特別奨励賞記念対談

伊東静雄、戦時下の抵抗と抒情

受賞者・青木由弥子
聞き手・冨上芳秀
葉山郁生

●伊東静雄研究のきっかけ

冨上　『伊東静雄―戦時下の抒情』で小野十三郎特別賞を受賞されたので、本の内容とか青木さん自身の伊東静雄についてのことを質問して、ぼくが聞くというより教えていただくと形でお願いしたいと思います。もう十年間ほど伊東静雄に関わってきたということですが、最初に伊東静雄という詩人を調べてみようと思ったところから教えていただきたいです。

青木　私が詩を書きはじめたのが東日本大震災の後からですが、同じ頃に伊東静雄を読みはじめました。同時進行ということになります。経緯をお話ししますと、東日本大震災の前後にちょうど子育てが一段落しそうになっていて、これからどうやって生きていこうかと考えているところで、たとえばエッセイでも童話でも評論でも書評でも、とにかくなにか文章を書く仕事をしたいなと思っていました。ちょうどそんな時に東日本大震災があって、言葉で何ができるんだろう、一体自分はどうやって生きていったらいいだろう、そんな迷いの中に入り込んで身動きが取れなくなりました。その時、この本の中でも書いたことですけれど、大学生の時に私の従妹が自殺するという事件があって、大学で美学とか美術史を勉強していることがまったく虚しく思われて、カウンセラーとか教育学とか、なにか実学を勉強するべきではないかとを思い詰めてしまった時のことを思い出しました。相談しにいった先生がリルケの講読を勧めてくださって、リルケを読んでいるうちに「私はこの世に生きていていいんだ」、美しさとか真実とか、それを言葉で伝える仕事があるんだと気付かされて救われたという経験があったんですね。その時のことを思い出して、詩をもう一回学び直してみようと思って、二〇一二年ぐらいから通信添削講座で比留間一成さんの教室に通いはじめたんです。

最初に自分の通信添削課題を提出すると、比留間先生からお電話をいただいて、「どこで詩を勉強しましたか？」学生時代にリルケを読んだだけで、その後は勉強していない、という話をしたら、「じゃあ伊東静雄を読みなさい」。伊東静雄の作品を読んだことはあったんですけれども、アンソロジーみたいなもので読んだだけで、難しい詩人というイメージがありました。私がそれを申し上げたら、「全集を持っているから」と。「そんなに作品全体の数は多くないから。全部読めるから」といってまず全集を貸してくださった。全集を読み通して、私の心に一番残ったのが、『春のいそぎ』の中の後半部分の作品、特に「春浅き」と、『反響』のほうに含められていますが、実際には昭和十四年前後にできている作品「そんなに凝視めるな」、その二つが非常に心に残った。リルケとの関連も気になって、伊東静雄を読み始めたのですが、

読んでいるうちにやっぱり書きたくなりますね。私はこの詩についてこんなことを思う、こんなことを考えると比留間先生宛のお手紙に書いていたら、「あなた、評論が書けそうだから評論を書きなさい」という話になって、比留間先生の同人誌にまず「伊東静雄とリルケ」とか、「伊東静雄の見つけ出した生と実存」とか、そういう形のエッセイというか詩論みたいなものを書き始めて、そうこうするうちに「詩と思想新人賞」を受賞した関係で、「詩と思想」関連の仕事を引き受けるようになったんです。

冨上　「詩と思想新人賞」というのは詩の賞ですか？

青木　詩の賞ですね。ちょうど比留間先生の教室の岡田ユアンさんが「詩と思想新人賞」を受賞されたというご報告があって、そうか「詩と思想」という雑誌があるんだと思って調べてみたら、ちょうど私と同い年の雑誌だった。二〇一二年に四〇周年記念特集号も出ていて、それを読んでみたら、かつて編集長だった高良留美子さんや編集に関わっていた方々の座談会で、私がやりたいようなことが語られていた。「命の詩を読みたい」、「ほんとうの意味での宗教的、アニミズム的な詩を読みたい」と高良留美子さんが言われていて、そういう詩を書こうと思って書いた詩が「詩と思想新人賞」を受賞することになりました。その関連で「詩と思想」の書評とかいろいろ仕事を引き受けるようになりました。北海道の木村淳子さん、ルイーズ・グリュックなど英米詩の研究者でもあるんですが、木村淳子さんの詩集の書評を引き受けて書いたんですね。そうしたら、木村さんが参加している「千年樹」という文芸誌を頂きました。その文芸誌が伊東静雄の故郷の長崎県諫早市で刊行されていたんです。伊東静雄について、ちょうど書きたいと思っていたので、長崎の「千年樹」の主宰者の岡さんに「伊東静雄の連載をしたいと思っているんですけれど、参加させていただけませんか」とお願いして、連載が始まりました。それが二〇一五年の秋でした。

●先行研究や批評への違和感

青木　伊東静雄を読みはじめてから連載に至るまでに何年か間がありましたが、その間に今まで伊東静雄についてどんな研究がなされているのか、どんな解釈がなされているのかを調べていったんですが、特に男性の批評家たちが、第三詩集、第四詩集のことをあまり高く評価していない。処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』が一番すばらしい、後は詩想が衰退しているという考え方をする人と、第二詩集の『夏花』が一番すばらしい、そこが頂点だ、あとは下降するという見方、大体どちらかに分かれるんだけれど、もっと調べていくと、第三詩集には戦争詩が含まれているという問題があって、みんなが検証を避けている。「戦争詩」批判についても見解が割れているんですね。桶谷さんとか保守的な人たちは、伊東静雄が戦争詩を書いたといっても、これは戦意高揚的なひどい詩ではないんだから批判するに当たらない、むしろ伊東静雄が戦争詩だからといって削除した、そっちのほうが問題じゃないかという批判をしている。もう片方の左翼系の人たちは、伊東静雄ともあろうものがなぜ戦争詩に手を染めたのか、な

んで戦争詩なんて下らないものを書いてしまったんだと、嘆くような感じなんです。いずれにせよ、伊東静雄の「戦争詩」を冷静に分析していない。伊東静雄研究の第一人者の田中俊廣さんも、伊東静雄を愛するがあまりなのか、あるいは平野謙の影響なのか、『春のいそぎ』を論じる時に「ことばの成熟と崩壊」という副題を付していて、「秀作「春の雪」とほとんど並行して、ことばの廃墟のごとき「大詔」「つはものの祈」「わがうたさへや」が成立している」と評しています。（『痛き夢の行方』）

葉山　今日の対談のインタビュアーは冨上さんですが、私も一部の議論、戦争責任論などに補助参加させていただきます。話の出た高良留美子さんとは、私も「新日本文学」終刊の少し前から、多少の交流がありました。高良さんが言われていることはよくわかります。

青木　田中さんが『春のいそぎ』論を脱稿された一九九五年時点では、そう評価していた、ということですね。伊東静雄を愛するがあまり、戦争詩を書いたということ自体が許せない、悔しい、そんな心境だったのか、と思います。じゃあそんなに伊東静雄の戦争詩ってひどいものなのかと思って色々調べていくうちに、静雄の戦争詩と他の戦争詩の違いが見えて来た。たしかに戦争詩アンソロジーそのものは、特に『辻詩集』はとにかくひどい（『辻詩集』には伊東静雄は参加していない）。みんな『辻詩集』がひどいから『辻詩集』を左翼の人たちは攻撃するんだけど、それ以外の『国民詩集』とか、「現代の万葉集を編む」みたいな感じで編まれたアンソロジーは、一部に戦争詩は入っているけれど、どちらかというと戦場詩であったり、銃後の人たちが戦地を想って、ニュース報道や映画報道を受けて実態を誤認したまま戦地について歌うという形のものが多い。後は故郷を歌うとか家族を歌うといった作品で、プロパガンダ的な安易なものではない。『辻詩集』が「戦争詩」の代表格のような扱いになっているけれど、むしろ『辻詩集』の特異性の方が際立つ印象もある。戦時中の作品すべてが否定されるべきものなのかという疑問が、まずひとつ浮かんできたんです。

葉山　それは大事な問題だから、ちょっと立ち止まって議論していきませんか？（笑）

青木　立ち止まってですか（笑）。

●主題についての価値評価、戦争詩の画一的な批判

葉山　それが戦後の伊東静雄論の入り口だった。ひとつは青木さんが伊東静雄の詩について考えていくときに、先行の評論がほとんど男性批評家で、批評の世界をほとんど男がやっていて、戦後の戦争責任論にのっかかって、評価はあまりにおざなり、イデオロギー的。

青木　イデオロギー的ということもあるし、主題が「生の実存」とか、「恋愛的実存」とか、そういうものについて観念的なことを深めている主題は非常に高く評価されるけれども、家庭について、女子供について歌った途端に「思想の衰退だ」っていう視方になることに違和感がありました。男性だけれども、三好達治はそうではなかった。伊東静雄が生活実

感を歌ったもののほうを三好達治はむしろ評価していた。朔太郎は観念を評価した。もちろん、朔太郎と三好達治との間での、観念性を評価するか、生活実存の描写を評価するかという問題もありますが、そのことに加えて、家庭的な主題を歌っている作品を収めた詩集の中に戦争詩が含まれているということで最初から先入見で見て、詩集全体を見ないような感情的な批評が繰り返されてきていて、なかなか論理的、歴史的な批評が行われていない。戦時中に家庭を書くことにどういう意味があったんだろう、ということも考える必要があると思うんですよ。子どものいなかった新妻が、出征した夫の後顧の憂いになってはいけないと自害して、それが美談として映画にまでなるような時代だった。家庭大事というのは大きな声では言えない時代だったと思うんですね。

一口に古典復興といっても、例えば蓮田善明なんて右翼の親玉みたいに言われているけれど、蓮田は戦時中に、意気軒昂な作品が評価されて古今和歌集とか雅やかな作品が否定されることに批判的なんですね。むしろ古今和歌集とか新古今和歌集のような、雅で繊細な抒情性を大事にすべきだと言っている。「四季」派はわりと古今和歌集とか新古今和歌集を大事にしますでしょう。立原道造にしても。そういう雅やかなものが、むしろ柔弱なもの、弱々しいもの、女々しいものとして否定されて、万葉集のような雄渾な、逞しい、男らしい、雄々しいものが評価される時代だった。

冨上　そこのところで、手弱女振りか、益荒男振りか、そういうふうに分けて、そっちのほうを評価するとかしないとかという話に入っていくけれど、先程言われた話の中で、「戦争詩であるから」、あるいは「戦争詩を書いたから」という否定の仕方は画一的に現在の中で見られる傾向だとぼくは思っているんですよ。

青木　そうですね。

葉山　それが戦後からずっと続いて、ほったらかしになっている。

冨上　詩人の戦争責任論という形で、詩の内容はともあれ、戦争詩を書いたというだけでもう断罪されていく。

葉山　書いたか書いてないかという事実みたいな、現実みたいな、そこだけであって、なぜ書いたか、どう書いたかは問うていない。

冨上　もう一つは戦後の世代交代の政治的な意味がある。例えば戦争が終わった。過去の権威のある詩人たちが復活しようとして入ってくる。そしたら吉本隆明なんかがバッと出て、詩人の戦争責任論というと、もう彼らはしゃべれなくなる。もう権威を失っていくんですね。

青木　小野十三郎の『奇妙な本棚』を読んでいて思ったのですが。ちょうど吉本隆明の激しい批判があった十年後くらいに、小野がその当時のことを思い起こして、表向き反省だけれども、実際は反省ではなくてちょっと言い訳みたいな文章を書いていますね。戦争責任論のイデオロギッシュな批判というのも、時代と深く関係しているように思います。戦後すぐの新日本文学系の戦争批判というのは、明らかに今まで抑圧されていた左派系の人たちの復活だったわけです。その後、

今度は五〇年代に復活したのは、戦地に行かされていて戦時中に詩を書けなかった若者たちだった。年上の詩人たちに「戦時中の詩は空白だった」と言われたことに対する激しい反発もあったわけですね。自分たちは戦地に行かされた、仲間たちも未来を絶たれて死んでいった、お前たちはその間何をやっていたんだ、ということで激しい論争になって、そこに「列島」の人たちがどう関わっていたかはまだよく調べてなくて、長谷川龍生とかがどういう対処の仕方をしていたのかは自分の中では整理できていないんですが。戦争責任論というとあまりにも吉本隆明たちのことがクローズアップされるけれど、その前から、戦時中弾圧されていた左翼系の人たちの巻き返しということもあったわけですね。巻き返したけれども、壺井繁治などは「あんた戦時中何やっていたの」と更に切り返しを受けたり、そういう世代交代の間の感情的なしがらみがずっと影響しているということもあるように思うんです。七〇年代、八〇年代になると、自分はリベラルの側か左翼、新左翼の側か、あるいはもっと中道か、右翼かというような、自分の立ち位置を色分けしたところから批評が始まる。戦争詩＝まず批判すべきものという前提から入る批評家がいる一方で、戦争詩とか日本浪曼派が意図的に批判されてきている、それをもうそろそろ復活させよう、というどちらかというと右派からの見直しも始まりました。桶谷秀昭さんとか。

葉山　桶谷さんは戦後必ずしも保守派から出発してないんですけど、どんどん保田與重郎に回帰しましたね。保田の全面肯定みたいなね。小野さんも、戦争に迎合するような詩から、完全に無縁であったわけではありませんでした。

青木　判官びいきみたいな心情があったと思うんですよ。藤田嗣治がスケープゴートみたいに批判されて、日本から出て行った。高村光太郎が反省して引きこもった。そういう形で目に見える活動をした人たちが基本的にスケープゴートにされて自己批判を強いられて、目に見えないところで動いていた人たちが全然槍玉にあがってこない。

●戦争詩の衣を纏った個々人の抵抗

青木　ちょっと話がずれるんですけど、長島三芳さんが戦時中の愛国詩集的なものを日中戦争のときに書いていて、それを戦後仲間たちに批判される。そのときに長島三芳がそれこそ苦渋の表情で語ったということですが、戦時中に刊行しようとした原稿が真っ赤っ赤に検閲されて、題名も書き換えられて、これでなければ出版は許さぬ、という形で戻されてきた。自分はいつ死ぬか分からない。だからせめて戦場の悲しみを伝えるためにこの詩集を遺そうと思って、題名とかを戦時色の強いものに検閲で変えられているけれど、後の人たちはそれを分かってくれるだろうと期待を込めて自分はそれを遺した。太平洋戦争のときには自分は戦地にも行っていたし、詩を書くこともできなかった。日中戦争のときの詩を後の人たちが戦地の悲しみを書いたものとして読み取ってくれると思っていたのに、表向きの題名とか、内容の問題を精査しないで表面的なところで〈あなたはなぜ戦争詩を書いた。反省

をしろ〉と迫る。もはや語っても乗り越えられない溝があるんだ、と彼は思い知って口をつぐんでしまう。それをエッセイに書き残しているんですね。そのような戦時中の事情と長島三芳の『黒い果実』とか、戦後の詩集を重ねていくときに、それは果たして転向であるのか。そこに非常に深い闇があって、戦後の人間が簡単に「首尾一貫していない」と批判は出来ないと思うんです。

戦時中に表向きは「戦意高揚的な作品だ」ということを書きつつ、それを掻い潜る形、一種のイロニーで書かれた作品もある。例えば戦時中に勇敢な戦士のことを書けと期待されているところで、敢えて家庭で耐えている奥さんのことを書く、あるいはいたいけな子供の命のことを書く。戦時中に米がなくなってきて炊事の煙も立たなくなってきているときに、里山にのどかに炊事の煙が上がっている景を美しい田園の風景として描く、そういう戦意高揚的な表面をまといながら実はそうではないものを私は書きたいんだ、という自分の詩人としての気持ちを優先した作品が実はいっぱいあって、その作品を私たちは見ていくということがまず第一に必要なんじゃないのかということを思います。要するに同調させられて、あるいは本当に洗脳されて戦意高揚的な詩を書くのが詩人の勤めだと思い込んで積極的に書いた人たちもいるわけですよね。洗脳されているわけではないけれど、数多の人心を感動させる歌を書く、それを男子一生の仕事だ、と誇りを持って軍歌を書いた人もいた。その人たちは仕事として戦意高揚の詩を委嘱されたから書いているわけですけれども、そのときに何が問題になるのか。私達がいざ戦時下に立たされたときにどのような詩を「書かないでいられるか」。書かないでいられるかって言い方は変ですけれど。伊東静雄が洗脳されていたとして、詩人としてどこで踏みとどまっているか、どこの時点で同調に負けたのかという境目を探していかなくちゃいけない。

葉山　これから議論していくことですが、それは青木さん、書かれていると思いますよ。大きい論点で整理すると、戦後の詩集からの削除問題もあって、伊東静雄が戦争詩を書いたかどうかという事実だけが戦後のいろんな詩の派閥、流派の中で弄ばれているという気がしますね。そのたびに伊東静雄の戦争詩が問題になる。それから青木さんが言われているのは、伊東を評したのが男性ばっかりだったから、伊東静雄が家族を書いたり子供を書いたりした作品がほとんど無視されて、戦争詩を書いたことだけが槍玉にあがる。

青木　特に第三詩集の場合には。

葉山　もっと言えば伊東静雄に限らず、同じ戦争詩を書いたにしても、本当の意図は、表面では戦意高揚を立てつつしかし本当は反対しているというふうな、イロニーと言われましたが、もうちょっと深い内容で見ていかないといけない。

例えば、永瀬清子は、単純に戦意高揚とはとれない「夫婦」という詩を『辻詩集』に寄稿した。戦後、「戦争と私」という文章を書いている。

「通報機関もその他すべてのジアーナリズムも挙げて戦時体制になった時、最も正しいのは何も書かない事であったかも

知れない。しかし私たちは詩人であり、何かを書くべく宿命づけられていた。（略）明けると知れた夜なら迷うことはないが、自分は永久に抹殺されるかもしれなかった」（葉山・注）

冨上　戦争詩に対する今の批評の仕方では、戦争に反対したか戦争に協力したか、戦意高揚の詩であるか否か、が基本になっていますが、伊東静雄の詩はその戦意高揚の時代の風潮に対して抵抗が見られるというふうな弁護の仕方も、戦意高揚を悪、抵抗を善とすることで、表裏一体だと思うんですよ。

●伊東静雄の戦争詩―伊東静雄は何を書かなかったか

青木　最初は弁護というイメージがあったんですが、そもそも弁護じゃないなと結局考え直したんですね。戦時中にあえて小さなもの、ささやかなもの、例えば野の花であったり、幼子であったり、あるいは自分の奥さんとか友人の奥さんのことだったり、そういうもの、私的なごく普通の日常をあえて書くことの意味はなんだったんだろうというのが、一つ考えるポイントになりました。それと同時に伊東静雄自身が日記にも残しているけれど、自分は一人の国民として仕事をなすべきじゃないかと。そうすると国のために何かしら国民を力づけるような言葉を書かなくてはいけないんじゃないかと思い悩むわけです。教師としても子供たちを士官学校に入れたり、そういうことにも邁進していかなくてはいけない。実際に明治天皇の御製を暗記できなかった生徒を非国民という言葉で彼は面罵したりもしている。戦時中に彼が洗脳されていた部分も当然あるだろうし、その洗脳がどの時点で解けたのか、どの時点で彼が反省したのか。

戦後になって富士正晴は「戦時中のことをそんなにがんばって反省しなくてもいいじゃないか」とむしろ保守的な発言で伊東静雄に対して戦争詩の削除を思いとどまらせようとしたけれど、伊東静雄は「戦争詩を削除してくれ」と頼んだ。それは、例えば作品としての質が悪いから削除してくれということなのか、あるいは戦時中に自分がこの戦争は正しい戦争だと思い込んでいたことがショックで、やっぱりこの戦争は負けたじゃないか、負けたということは正しい戦争じゃなかったんだ、という発想からの反省であったのか、そのあたりがまだはっきりせず、私も断言できないんです。私の立場としては、公の教師でいた時点の、公の立場としては戦意高揚詩を書くべきだと思っていて、だけれども私情の詩人の部分では同調したりするのは嫌だという気持ちがあって、国家のための詩を書かなくてはいけないという頭の問題と、そういうことを強いられて書くのは嫌だという心の問題とがせめぎあった結果出てきた戦争詩が、伊東静雄の戦争詩だと思います。特に重視したいことは、何を歌わなかったか。伊東静雄は絶対に若者たちに命を捨てよと歌っていない。身を尽くせ、命を捧げよ、と歌わない。それが、伊東静雄が「書かなかった」戦争詩だと思います。戦争に行った子供たちが、教え子たちが読んで力づけられるような詩を書こうとか、銃後に残る人たちが心の支えになるような詩を書こう、という動機はあったと思います。日本が滅びないように祈る、日本が

昔からこれだけ続いてきた歴史だから大丈夫だって力づける詩を書く、そういう形の戦意高揚詩を書こうと彼は思ったのではないだろうか。だから少なくとも「戦地に行って命を捨ててこい」という詩は書いてない。そこのところに伊東静雄が引いた自分なりのラインがあったと思う。自分は戦争に行けないけれども、自分の子供が戦争に行けて嬉しい、というような詩を書いた人たち、自分は戦争に行かないのに、若者たちよ血を捧げよ、という詩を書いた人もいた。

●戦時下の屈折、イロニーに託された表現

青木　戦争中のファシズム、ウルトラナショナリズムの狂気になぜ飲み込まれてしまったのか、その反省から見る時、命を捨てよ、家庭を捨てよ、と国のために犠牲を強いる詩は書いてはいけない戦争詩、戦争中で私たちはがんばって耐えている、とにかく戦争が終わることを祈ろうとか、日本が勝つことを祈ろうとか、日本は滅びないということを信じようとか、そういう祈りに向かっている詩というのは、積極的に肯定はしませんが、否定しなくてもいい戦争詩なのではないか。他に、実際に戦場に行った兵士たちとか歌人たちとかが、例えば捨て去られていく軍馬、もちろんそこに自分たちの兵士のイメージを重ねているわけですけれど、怪我をしたとか病気になったということで戦地に残されていく軍馬とかいますね。その軍馬の悲しみを歌ったりしている。そういう形で戦地における兵士の悲しみを許容される範囲で、それこそ特高に引っかからない、あるいは憲兵に引っかからない範囲で書くためにはどうすればいいか、そのように韜晦して書いた詩を、むしろ私たちは改めて見出していかなくてはいけない。その意味では、「見出されるべき戦争詩」というものが、あるだろうと考えています。

理由を明示せずに国家権力が庶民を取り締まれる状況下で、モダニズム的な曖昧な書き方をすると検挙されるわけです。取り締まる方は、「わからない」ことを警戒するわけですね、何か暗号的な意味が隠されているのではないか、と疑ったりする。「わかりやすい」書き方の場合でも、社会派的な書き方をすれば検挙される。心情に訴える、抒情に訴える場合には、そういう人たちにも意味が伝わるということもあって、戦地の悲しみはある程度、抒情性の中で許容される、勇ましさが不足していたとしても。だから兵士たちについての思いを、あなたは頑張っていますね、私も頑張りますよとか、あなた方の行いに感謝しますとか、そういう形の感情のやりとり、祈りのやりとりの形の詩は、おそらく特高や治安維持法を笠に着る人たちからも逃れて書くことができたのではないか。

●抒情という抵抗

葉山　青木さんの言われる戦時下の抒情ということで、僕は国家とか戦争とか考える公の立場と、彼の私的な立場、そのまま二つあると思うんですよ。本書で書かれているように、その私の部分をあくまで大事にされたということで、今言われているように戦時下の抒情詩は可能だったということだっ

たら、伊東静雄は抵抗していると僕は思う。戦争に向かう時代、自分の病んだ魂と戦い、日本という国と時代も病んでいる、その両方と戦おうとしていた。少し古いものですが大学生の頃、親しんだ橋川文三の『日本浪曼派批判序説』を用意してきました。「伊東は、一人の病める魂としてあの戦争と戦っている。彼の日常生活の苦悩と戦争の苦悩とは、ともに克服さるべきものとしてとらえられ、民族の病理と自意識の病理とは一体化してとらえられている」。橋川文三は、共産党員やプロレタリア文学者の転向だけでなく日本の戦前に対し広義の転向問題を考えている。「後世の人々は、二十世紀の三―四十年代、日本の戦った大きな戦争の姿とその意味とを、むしろ精密に伊東の詩集によって測りうるであろう」とまで言っていた。橋川文三の先の言い方で、二つが一体となっているところは、引用だけでは戦時に迎合したと取られるかもしれません。伊東の心の中に矛盾や分裂があって、それが当然としても、戦地と、家族や教え子とでは伊東は別様に書いているという青木さんの論証では、はっきり二方向は別と捉えられる。日本浪曼派のイロニーの精神からすると、両者がイロニーの関係にあるとも言える。

青木　その意味では、私は伊東静雄は抵抗している、という側に立つ形ですね。だから、戦争詩を書いてしまったということや、戦後、戦争詩を削除して自分の過去を隠蔽しようとしたという様な批判の弁護ではなくて、伊東静雄なりの見えにくい抵抗があったという見解を提示するのが私の今の結論です。今回の本について言えば、伊東静雄なりの見えにくい抵抗があったということを、むしろもっとはっきり言うべきであった。今それを思っていて、実は「詩と思想」の一、二月号にそれに関わる論考も書いたんですけれど（「伊東静雄の「戦争詩」と〈抵抗〉を考える」）、やっぱり伊東静雄は戦争詩を書いたんだからそこを否定しなくちゃだめだよね、そこをきちんと批判しているかどうか、っていう視点で読む人もいる。伊東静雄を戦争詩を書いてしまった「悪」から救い出そうとしているけれど、うまく救い出せないで結局終わっているねという見方をする人もいるけれど、その人達に、伊東静雄の見えにくい抵抗を取り出そうとした、私の意図はそこなんです、ということをもっと明確に言うべきだったというのが今現在の反省だし、これからどのような方向で書いていけばいいのかというのが私には見えてきた気がします。

●私的な主題の価値評価

青木　伊東静雄の作品テーマや手法についての評価の問題もありますが、私的なものをあえて書くところに男性批評家たちは価値を見出してこなかった。伊東静雄が盛んに読まれたのは、全集の刊行部数の履歴などを見ると六〇年代、七〇年代の学生運動の時期なんですね。戦時中であったり、学生運動期であったり、言い替えれば読者が心身の実存にさらされた時代に求められた詩人だった。それは特に第一詩集と第二詩集に顕著な特徴であるわけですが、そうなると家庭とか妻とか子供とかそんなものを歌ってどうする、詩想が衰退したという見方にも繋がっていくわけです。

冨上　それはなんか、すごくおかしい。詩人だっていろんなものを見ていろんなものを書きたいじゃないですか。観念的な理念みたいなものだけでなくて。例えば時代が戦争中で勝ったといって国民がみんな喜んでいる。そしたら自分も喜ぶような状態になる。だけど、生活が苦しかったら生活が苦しい、家庭の食べ物もなくなってきたというような話も書く。伊東静雄の場合は自然なんかも書きたいわけですね。詩人が書きたくて書いたものを、戦中の戦争肯定の立場、戦後の戦争否定の立場からではなく、詩人のなんでも書きたい本能みたいなものから見ていったらどうかと思うんですけど。

葉山　今のウクライナの戦争を見ていると、やっぱり東欧のしんどさを考えます。かつて変革の希望があった、ポーランドとかハンガリーがなぜ右翼のほうへ行くのかと思わざるをえない。戦争とか難民とか外部のことじゃなくて、自分たちの生活が大事だと思う。日本でも、生活保守とまとめて批判したこともありました。繰り返していますよね。イデオロギーと生活、あるいは私事みたいなものとがね。

青木　恐ろしいなと思ったのが、昨日の（授賞式での）お話の中でもちょっと紹介したんですけど、伊東静雄の全集未収録作品で、戦時中に書いた詩がもう一篇、新聞に載っていたものが見つかって、それを教えてくれた方がいたんです。「撃ちてし止まむ」という同一テーマで、詩人たちに詩を書かせている。伊東静雄の掲載日の前後にも有名な詩人たちがいっぱい書いていて、たとえば川路柳虹は、もはや講和はありえない、敵を殲滅するほかないんだ、そうじゃなかったら自分たちが死ぬんだという書き方をしている。今のウクライナとかロシアの人たちの、相手を殲滅するしかないんだ、戦わなかったら自分たちが死ぬんだという、生か死かの二者択一になっている。イスラエルとガザも同じことになっていて、イスラエルの人たちも共存はありえない、特にネタニヤフですね、右翼の人たち。共存はありえないからハマスを殲滅するしかないというように、殲滅という言葉が出てきている。ハマスはハマスで、若者たちに、エルサレムに血を捧げよと言っているんですよ。

葉山　そこまで言っている。日本の特攻と同じですね。日本浪曼派も、当時の若者に死ぬ覚悟をさせたと批判されました。

●絶望的な状況下におけるロマン主義

青木　自分たちは勝てないことを分かっているから、あとはもう自分達の存亡をかけて、世界中の人達にイスラエルに抵抗せよと訴える。そういう形の死への欲望というか、タナトスに囚われている。日本浪曼派の問題を考えたときに、もともと日本浪曼派は（革命を成功に導いたフランス・ロマン派ではなく、革命が理念に留まり続けた）ドイツ・ロマン派から影響を受けているけれど、困難を突き抜けていってどのように生きていくか、どんな困難があろうとも不安にとらわれずにそれを突き抜けて生きるためにはどうすればいいか、絶望的な状況下で生きる意欲をどのように見出すかという芸術思潮だったはずなのに、結局そのイロニーが読み違えられて、あるいは当時の風潮にどんどん染まっていって、いかに英雄

的に死ぬか、いかに美しく死ぬかという方向に読み替えられていく。その読み替えられていくところに若者たちが影響されたわけですね。逃れ難い自分の死に意味を見出したいと願った若者たちが、いかに美しく死ぬかというところに影響を受けて死んでいったけれど、そんなの嘘っぱちだったじゃないかということで、杉浦明平にしても他の人達にしても、激しい批判を出した。そうした感情的な問題とは別に、日本浪曼派の本来やろうとしていたことは何かという問題があります。伊東静雄はその日本浪曼派が本来やろうとしていたところにどこまで関わっていたのか。小川和佑さんなどは、伊東静雄はあんまり日本浪曼派に共鳴していない、詩もそんなに沢山出していない、むしろ「コギト」のほうにいっぱい出しているって一生懸命〝弁護〟しているんですけれど、「コギト」だって保田與重郎ですから（笑）。だから結局、日本浪曼派じゃないんです。問題は保田與重郎なんです。

保田與重郎＝日本浪曼派というけれど、日本浪曼派だって亀井勝一郎もいたし、同人ではないけれども真壁仁のような、元左翼系の、のちにも左派的な詩を書いた庶民派の詩人もたくさん詩を寄稿している。だから日本浪曼派の問題自体もかなり表層的なところで留まっている部分があって、最近ようやく歴史的な検証が行われるようになってきたところだと思います。感情的な応答ではなく、歴史的に検証ができる段階に戦後五十年以上経って、もう八十年ですか、漸くたどりついた。たどりついた時には戦争したい人たちが政治家にいっぱい出てきていて（笑）、結局ようやく反省というか感情的な反応ではなく歴史的な検証ができる時点に来たら、その感情が忘れられたことによって「再び戦争が出来る国にしよう」「日本はもっと軍隊を持つべき」というような人たちが出てきている。

葉山　憲法九条の平和主義が、戦争犠牲者、そして引揚げとか、戦争の悲惨な記憶が残っている間は力を持つ。日本の場合、占領があって、ここでも言論弾圧の戦後の問題も大きいと思うんですね。戦争責任を追及しようと思ったら戦後責任も重ねて追及しなくちゃいけない。戦争責任を追及する戦後責任ですね。自国民の責任でアウシュヴィッツ裁判をやったドイツと違い、日本は自国レベルで戦争責任に関し、法的・司法的責任追及がほとんどできなかった。治安維持法を推進した、戦前の裁判官、思想検事も責任を取っていない。だから戦争責任の文脈が次から次に変わってきましたね。槍玉にあげられた、伊東静雄などが典型だと思うけど。それを青木さん、今の議論だったら伊東静雄批判を全部跳ね返していただいている（笑）。

青木　伊東静雄は、例えば三好達治レベルの「戦争詩」批判を受けたかといったら、そうではないですね。伊東静雄ともあろう人がどうして書いちゃったの？　というような視方。北川透さんなども、伊東静雄の戦争詩は戦意高揚的な詩では全然ないと書いている。富士正晴もそうですね。当時の戦意高揚詩などと比べたら伊東静雄の戦争詩は要するになってないわけですよ。戦争詩になりきっていない、戦意昂揚詩としても中途半端で「出来が悪い」。そこのところで批判をされ

ていないにも関わらず、伊東静雄＝日本浪曼派＝右翼みたいな言い方を最初からする人たちがいて、実際に読んでみたの？　と聞きたくなる。「日本浪曼派関係は全部悪だ」みたいな極端な色分けを未だにしている人もいる。

葉山　多分そこは桶谷さんの本を読んでみると、保田與重郎を戦後思想の文脈から完全にパージしたからです。保田與重郎の代わりに、槍玉にあがるのが例えば、伊東静雄だという戦争批判論だと思いますから。書いたか書いてないかという二者択一とか、書いているんだけどそこは相対的に伊東静雄は戦意高揚じゃないんだとか、そういう議論になった。もう今となっては。青木さんは戦時下の抒情まで踏み込まれて、公と私の区別も全部立てられているんだから、これまでのレベルは、青木さんの伊東静雄論で乗り越えられていると思うのね。それを遠慮して言っている、そこは僕はむしろ勿体なかったなあという感じなんです。今聞いたら、そうそう、その通りだと思いますけど。

●戦時下における詩人の姿勢、戦後の態度

青木　保田與重郎のパージにしても、戦時中に華々しく活動していた人たちに次の世代が罪を負わせて抹殺したという形でもあるわけです。けれど、戦時中に華やかなりし人たちでも生き延びた人たちもいた。軍歌なんか散々書いていたけれど、今度は戦後ころっと民衆歌謡のほうに切り替えて、生き延びてやっぱり華々しく活動しつづけた人もいた。大木惇夫みたいに本当に反省して本当に打ちのめされてしまった人もいた。むしろ仕事として割り切って、戦時中に戦意高揚詩を求められたから、詩人という職人なんだからそれに応える詩を書かなくちゃいけないと戦時中に戦意高揚的な詩を書き、今度は戦後民主主義になったから民主礼賛の詩を書かなくちゃいけないんだと割り切って仕事として民主礼賛の詩を書いた人たちのほうが生き延びて、例えば大木惇夫なんかが特にそうですけど、本当に悩んで苦しんだ人たちがむしろパージされたところが理不尽だと思います。

葉山　散文の世界では火野葦平もそうでしょうね。一番反省した人を一番貶めている。ころっと完全に入れ替わって戦中も調子よく、戦後もなんらかの形で調子よく、そういう人たちが一番だめなわけでしょ。

冨上　でもね、批評の視点もあると思う。戦中の批評だと、戦意高揚をやったから愛国者でいいんだ、という強調の仕方になる。今度はまた逆に、戦後になるとまた別の批評の視点が出てくるわけ。詩人にはそもそも多様な側面があって、その視点に応じた自分の側面を出してくる。僕はちょっと人間不信ですけど、そういう感じをいつも持っているんですよ。

葉山　歴史と個人みたいなことで言えば、詩人は詩を書くことだけで歴史を担える、全人格的な表現ができると思うんですけど、もうひとつ世界史という歴史を考えると、その時代・社会の中で、例えばドイツ・ロマン派と日本浪曼派がどうだったのか、個人を超えた時代の主潮としてあるわけですよ。

　ここでドイツなり、日本のロマン的イロニーに触れます。

ロマン的イロニーは、自我（その内面）を解放したが、その自我を絶対的な統一原理と見なしていたから、自我によって外界・存在が規定され、自我によって認められた限りでの存在は、他方で自我によって消滅させられる。恣意的な自我・主観は、いかなる客観性にも到達しないと、ヘーゲルが批判した。ロマン的イロニーは無限の自己否定になると言われ、己自身の空虚さを自覚するばかりとなる。ここから伊東静雄に話を戻して、先の病める魂じゃないが、彼はこの空虚・虚無をいたく感じ取っていたのではないか。だから、ヘルダーリン的ギリシャに倣って、あの戦時下に第三詩集『春のいそぎ』の古典的美の造形に努力を傾けたのではないか。

ロマン主義はそもそも近代社会が生み出したものですが、その志向は反近代ですよ。近代の世情に反対して、そこで孤独になり、自我を獲得して自然を発見したんだけれど、英仏と違い、ドイツや日本では、政治的にいうとむしろ「前の時代に戻ろう」という復古・保守になってしまう。反近代でありながら、その反近代を生んでいるのがまた近代だという、ロマンチシズムの二重性みたいなことがある。

青木　福田恆存的な言い方をすると、イギリス、フランスとかの先進近代国家と、ドイツとか北欧の後進近代国家があって、日本は後進近代国家なんですよ。それで、もう植民地政策がうまくいかなくなっていることを、帝国主義の列強の人たちがやった事実として見て確認して、同じ歴史を繰り返しちゃいけないはずだったのに、自分たちも植民地を持って同じように近代化しようとして、そこに政治的なアイデンティティを求めていった一方で、自分たちの自我、アイデンティティの根拠をもっと中世とか歴史の古いところに求めたのが浪漫主義ですよね。

葉山　だからドイツ・ロマン派は後期になると、神話や伝承、幻想を含め、中世賛美になる。日本浪曼派は、新古今から古今や万葉集。万葉集もアララギ派と違ったものになる。

●文語体の詩をどう考えるか

冨上　僕もその辺りでずっと同じ議論をしているけれど、伊東静雄の文体を考えると、青木さんがなぜ文語体の詩を書かないかというあたりを僕は知りたい。文語体の詩は、僕は嫌いなんです。文語体の詩が嫌いというのは、僕は文語体の観念でものを考えないから。文語の言葉では考えない。僕は自分のしゃべっている口語で考える。そうすると、戦争詩なんか見ていくと、ものすごい文語体、古い言葉、そういうものの中に戦争の、わーっというような高揚感がずっと出てきて、そういうものがほとんどなんです。しかも内容もです。それに対して伊東静雄にすごく影響されたにもかかわらず、青木さんがなぜ文語体で書かないのかというあたりを僕は聞きたいなと思ったんです。

葉山　現代詩と並んで短歌もつくられるんだったら別だと思いますが。

青木　口語自由詩＝現代詩だと思っているので。近代詩には口語も文語もありうると思っていて、でも、書けないというか、書かないですね、私は。

冨上　だから教養としては読めるんですよ。近代詩とかは伊東静雄のこんな感じの文体もいいなとは思うんですよ。だけどその文体の中、万葉集とかの文語に入っていったときに戦争詩のプロパガンダ的な部分に入りやすい部分があると僕は思っているんです。

青木　文語の持つモードチェンジの力、例えば文語の聖書にしても、どこかいま現在使っている言葉とは違う言葉だというモードの変換がありますよね。昔から伝わってきたものだという箔がつくわけですね。文語は今現在の言葉では会話体ではない。モードの変換があって、歴史的な箔がつくから、厚みが出る、深さではなくて。例えば内容が空疎であったり、あるいは自分の意志を殺して国家の意思を反映させたりするプロパガンダ的な詩の、形というか、格調を整えるための文語、それで詩の形ができる。一方で、個々の生命を超えて生き続ける言葉の力、文化の力、いわば死者たちと生者たちが共有し得る空間に導くモードチェンジとしての「文語」の使用もある。だから文語を借用するときの意味が、歴史的な深さに共鳴されたものなのか、あるいは作品への箔付け、格付けのために使われるのかという問題、その差異は大きいと思います。

●教師としての伊東静雄

冨上　もうひとつ、教師と詩人という話があったんですけど、伊東静雄は詩人であることを学校とかそんなところでは言わなかったという。だけど現在の状況からいっても、現代はそんなに詩人というのは重要視されてないじゃないですか。だけど伊東静雄なんかはその時にすごく活躍していた。この本の中にも出てきますが、何か公的な文章があって、その後に詩が書かれてあったり、詩人の話が書かれてあったり、小説が書かれてあったり、今よりもはるかに文学が非常に重要視される世界だったと思う。そのときに詩人であることを、学校で言わなくてもみんな知っていたんではないかという疑問がある。

青木　詩や文学に興味がある人が、例えば文芸誌なんか読んでいて、伊東静雄という人が詩を書いていて詩の賞を獲ったことを知って、あ！「あの乞食」（乞食は伊東静雄の住吉中学でのあだ名ですね）「乞食のこうちゃん」が、詩人だったと気がついてびっくりするパターンはけっこうあったらしいです。同僚の人たちの中にも当然知っている人はいたけれど、伊東静雄は殊更に自分は詩人ですと言ったり、詩の賞をとりましたと詩集を配って歩くようなことはしなかった。

冨上　当然教師だってインテリゲンチャだとすれば文化的なものは読んでいるし、今だったらぼくなんかが詩書いていると言ったって、それは「釣りが好きやな」くらいの関心しか引かないんだけど、伊東静雄だったらこんなに有名で影響力ある詩人なんだ、という反応だった。

青木　伊東静雄の含羞の由来ですね。伊東静雄の場合は性格と言ってしまえば一言で終わってしまうんですが、自分の詩が少数の人にしか読まれないものだと認識していたと思うんです。少数の文学愛好者には評価されるけれど一般的に評価

されるものではないと。例えば高村光太郎みたいに有名になりたい、著名になりたいと願わなかった。あまのじゃく精神かもしれないけれど、避けていたところがあって、それが教師においては、たとえば文法をきっちり教える、古典文学をきっちり教える、国語教師に徹するという姿勢として現れている。詩人として詩を教えるということは全然授業中にはしていない。ただ、自分を訪ねてきた若者たちと詩について語り合ったりするのは非常に好きで、そういう文学青年とは友人として付き合っている。教え子という形ではないんですね。庄野潤三とか田中光子との関係を見ても、あれはたぶんリルケの『若き詩人への手紙』とか、『若き女性への手紙』を意識して、リルケに倣って自分の詩論を書き送っていたと思うんです。番号まで振っていたらしいですね。けれども、その庄野潤三宛の手紙は燃えてしまった、それが本当に残念なんだけれど、詩論の片鱗は作品の中に伺われると思います。地方の文学同人誌を送ってきた人に丁寧に返事も書いていて、地方の詩誌に自分も詩を寄稿したりしている。若者たちや詩を愛好する人に対しては胸襟を開いて接していたけれど、文学が好きかどうかよく分からない人たちに対してはあくまでも国語教師として厳しく接していた。

●体のこと、家族のこと

冨上　伊東静雄は相当体が弱かったんですか？

青木　弱かったと思いますよ。

葉山　丙種というのはね。普通、健康な人だったら大抵甲種で行くんですけど。丙種は相当弱いですね、三島と同じで。なにか病気が？

青木　いや、病気というか、伊東静雄の上のお兄さんたちはみんな病気で死んだり、幼いうちに死んだりしていて、伊東静雄も弱かった。伊東静雄の弟くらいになってくるとわりと丈夫なんです。それと女性たち、お姉さんとか妹とかはわりと丈夫なんです。だから家系的な問題もあると思います。あと家の裕福度、家庭環境が伊東静雄の産まれた頃はまだそんなによくなくて、伊東静雄の弟が産まれた頃にはかなりよくなっていて、だから弟はかなり丈夫な体を持って産まれてきた。そういう問題があるかと思います。

葉山　家族を背負っていたんでしょう。虚弱体質なのに、上の人がみんな亡くなられるから。

青木　四男なのに役割が長男なんです。

冨上　三国ヶ丘の家のことが出てきて、生徒なんかも来て、すごく寒いとあるじゃないですか。

青木　隙間風だらけの借家ですね。

冨上　今はどうなんですか。行かれました？

青木　これから行こうかと思っていたんですけど（笑）。

葉山　住んでいた家の位置はほぼ特定できたって誰か言ってましたよ。

青木　住んでいた家は今は無いんだけれど、地番っていうんですか、地番に至るまでの地図を伊東静雄は書き残していて、その中のいくつかの建物はまだ残っているらしいです。

冨上　丘みたいなものがあってとか。

葉山　三国ヶ丘ね。

青木　三国ヶ丘に引っ越した理由は、奥さんが職場に通いやすいからということですね。奥さんの稼ぎで食べていたから。

葉山　伊東静雄も仕事しているでしょ。

青木　仕事していて奥さんより高給もとっているんですけれど、最初は伊東静雄のお父さんの借金返済にあてていて、借金返済が終わった後はどうも詩の活動とかそういうのに使っていたらしく、生活費には供出していないんです。家を建てるとか何か大きなことのために貯めていたのかもしれないですが。生活費は奥さんの給料で賄っていた。伊東静雄の借金は伊東静雄のお父さんが親族の借金に判子を押していたのが不渡りになって背負ってしまった借金らしいんですけれど、江藤淳が「博打かなんかで作ったんじゃないか」ということを言ったこともあって、なんとなくそれが流布してしまって、お父さんの不摂生で作った借金みたいになっていますが、伊東静雄のお父さんの名誉のために、そうではなかったとここで言っておきます（笑）。

●これからの課題

葉山　最後、冨上さんとともに聞かないといけないのは今後の青木さんの仕事、伊東静雄について続編を書かれるのかどうか。

青木　続編になるかどうかは分かりませんが、今回は特に第三詩集と第二詩集を中心に読んだので、第一詩集と第四詩集が残っているんです。だから、伊東静雄が伊東静雄になる以前、要するに若い頃に、例えば短歌とどんな関わりがあったのかとかを今調べ始めたところです。それから伊東静雄の戦後の作品についての意義をやっぱり考えていかなくてはいけない。同時代の戦争詩の問題という横軸の問題も残っています。伊東静雄がいかに伊東静雄になっていったかという詩人の生成についての問題と、伊東静雄の戦後の詩についての解釈、現代詩との接続の問題も考えていかなくてはいけない。伊東静雄についての単著という形になるのか、あるいは戦争詩の問題とか昭和詩の問題とか、そういう枠組みになるのかまだ分からないんですけれど。

冨上　もうひとつ、三島をやってはるでしょう。

青木　三島由紀夫との関係はやっぱり、日本浪曼派をいかに捉えたかという問題と、近代とは何かということに関わってくると思います。日本浪曼派を三島由紀夫は「いかに美しく死ぬか」と読み取ったけれども、伊東静雄は三島を俗物と言っていて、なおかつ伊東静雄はどんな困難があっても乗り越えるための思想として、日本浪曼派をたぶん正確に受容していたと思うんです。

葉山　いい論点ですね。伊東静雄が戦前戦後に矛盾をはらみながら考えていったことが、三島に再生産された一面があるだろうと思います。

青木　年齢と精神発達の差異もありますね。三島由紀夫が昭和と同じ年齢。昭和十年代、三島十代の頃に……。

葉山　戦中に会いに行っているんですよね、有名なエピソー

ド、『花ざかりの森』の出版についてです。

青木　戦時中に伊東静雄に自分の小説の序文を書いてくれって言いに行って、伊東静雄は丁寧に対応して、「私のようなものが書かなくてもあなたは十分平気です」って言って帰したのに、実際に蓋を開けてみたら日記に俗物と書いてあった。桑原武夫や富士正晴、小高根二郎たちは、全集を編む際に、日記の中に出て来る、まだ生存中で差し障りのあるような人達の名前を全部伏せて刊行したのに、三島由紀夫のところは分かるように残して出した。三島由紀夫は「伊東静雄の日記も含んだ全集が出る。自分はどういうふうに書かれているか」と期待して開けてみたと思うんですよ。読んだときはショックだったと思います。読む前後の三島由紀夫の伊東静雄に対する表現が、最初はもう伊東静雄大先生で尊敬しまくっているのに、後半はすごく屈折するんです。

葉山　だけどそういう二人の複雑な関係があるとして、それよりもロマン派から出発しながらどこへ行ったのかということの後ろのほうと繋がる。やっぱり問題は日本浪曼派の位置付けですね。それを青木さんの今後にぼくらは期待したいと思います。

於：大阪文学学校　二〇二三年十一月二十五日
十時～十二時

葉山・注

当日の座談会で用意していたのだが、議論にあげなかった論点がある。戦争と文学の関係については、現代詩と並行して、短詩型の問題がある。戦後の俳句第二芸術論や、小野十三郎の反短歌的抒情論があり、伊東静雄の戦後も含めた抒情を考える時、必要な視座だろう。戦中と戦後の俳句と短歌の流れには大きな差異がある。俳句史には昭和初期の新興俳句運動が存在した。「戦場俳句」に対する「戦火想望俳句」が書かれ、有名な京大俳句事件として弾圧された歴史がある。現代詩と現代俳句、現代短歌のジャンル間では、戦前・戦後の連続性と非連続性の相が微妙に違っているだろう。